

JSIR NEWS LETTER

国際リハビリテーション研究会

巻頭言

『国際リハビリテーション研究会2.0? 1.1?』

河野 眞（国際リハビリテーション研究会代表、
国際医療福祉大学成田保健医療学部）

国際リハビリテーション研究会の発足から3年が経過しました。理事の任期にして1期分です。そのため、次の3年を迎える今年度の総会で、新しい役員体制が決定され、2期目も河野が代表を務めることとなりました。皆さん、どうぞよろしくお願いいたします。

ここまでの3年間、当初イメージしていた通りには活動が進まなかった部分、予想外の形で活動が展開した部分とさまざまありました。去って行った人々、新しく活動に加わってくれた人々、そういう面でもさまざまでした。

思えば、発足からの期間のうち、ほぼ半分に相当する1年以上をコロナ禍に見舞われ、いまだ終息が見通せない状況です。そのせいで滞っている面もあれば、逆にこの状況でこそ進んだ面もあるでしょう。

この間の停滞と進展が、次の3年間で国際リハビリテーション研究会をバージョン2.0へと進化させるものなのか、あるいは、進化はバージョン1.1程度にとどまるのか、まだまだ予想も出来ません。いずれにしても、国際リハビリテーション研究会では、ここまでに歩んできた3年間の旅路を礎として、新たな役員体制と事務局体制で次の3年間に向かおうとしています。会員の皆さんには、国際リハビリテーションという専門分野を確立する冒険の旅路に今しばらくお付き合いいただければありがたいです。

3年後にどんな景色が広がっているかを楽しみにしつつ、まずは足元の一日一日を大切に過ごしましょう。

【特集】「Online Interview ~矢倉医師のドイツ国際平和村と国際支援にける思い~」

【国際活動対談】

矢倉 幸久（富良野協成病院整形外科主任部長、
ドイツ国際平和村ボランティア医師）



勝田 茜
さん

矢倉 幸久
さん

古川 雅一
さん

「ここに自分のやりたかったこと
があると強く感じました。」

本特集では、ドイツ国際平和村で活動が続けられる矢倉幸久医師へのインタビューを行いました。同じく平和村で活動経験のある事務局の勝田さんと編集担当古川さんの対談形式でお送りします。



古 活動を通してやりがいを感じる瞬間を教えてくださいませんか。

矢 平和村には母国で治療ができない重症な子供がやってきます。その子供たちが元気になり母国に帰る時、最高の笑顔を見せてくれます。その笑顔を見る度にまた活動を続けたいと感じます。これが源です。明日生きている確証のない子供たちが元気になる姿を見ると心に染みるものがあります。子供たちには自分の経験を語れる大人になって欲しいと思います。また帰国した子供たちの成長を聞くことも楽しみの一つです。

古 勝田さんと活動を共にされた時期がありますが、OTとしての勝田さんの印象に残るエピソードはございますか？

矢 アンゴラから来た大腿部切断に至った男の子ですが、リハビリの時に勝田さんが車椅子に乗ってその子が車椅子を押していました。義足は付けていたのですが、個室に帰るまでの機会も訓練に活用されていたのは印象的でした。

古 勝田さんは矢倉先生の活動において印象に残るエピソードはありますか？

勝 平和村で子供たちが話すドイツ語は少し独特(母国は別のため)で、学校などで勉強しても会話が難しい場合があります。そんな中で会話ができる語彙を増やしている姿が印象的でした。ドイツ訪問は3か月に1回ですが、3か月後に戻ってこられても会話が出来ており、子供たちへの愛情を感じました。

また、処置室で待つだけでなく子供たちのシャワー介助なども率先して行われていました。翌日、傷の経過を観る際もシャワーから入られていました。日常の動作から必要な処置も検討されていました。傷だけでなくその子の全体をみられており、とても感動しました。医師もセラピストも「患者さんを知る」視点を身につけるのに国際協力を経験することはとても役立つのではないかと感じました。

矢 そのように見て頂き大変嬉しく思います。実は子供たちの使う言葉は普段からメモを取っていました。また日頃から「患部だけを診るのではなく、精神面も含め患者さんの全体を診る」ことを大切にしています。傷だけ見ても患者さんの全体像はわかりません。

(以下：矢倉医師⇒矢、勝田⇒勝、古川⇒古)

古 この度はインタビューにご協力を頂きありがとうございます。まずは医師を志したきっかけや北海道(富良野)に生まれている理由などをお聞かせ下さい。

矢 よろしくお願ひします。生まれは愛知です。その後、父の転勤で高校までは埼玉で生活をしました。富良野移住は高校生の時にドラマ「北の国から」を観て自然豊かな場所に住みたいと感じたのがきっかけです。また同じ時期に週刊誌で旭川医科大学のスキー部が大雪山でスキーをしている記事を観ました。私もスキーをしており旭川医科大学以外は考えられなくなりました。私が小学生の時のスキー指導員の方がハンディキャップスキーの指導もされておりました。「目が見えなくても、足が片方しかなくてもスキーを楽しめるんだぞ」と話された言葉が強く印象に残っています。「体が不自由な方も一緒にスポーツを楽しめるようになる」それに関わりたいたいと思い医師を目指しました。

古 平和村に関心を持たれたきっかけと、活動開始までの様子をお聞かせ頂けますか？

矢 やりがいを感じ地域医療を行っていましたが、40代になり自分が医師を目指したきっかけは何かを改めて考えました。2006年にドイツサッカーワールドカップを観戦する機会があり、宿泊した都市エッセンの近くに以前聞いた平和村があることを思い出しました。帰国後に平和村について調べ2007年に訪問する機会を得ました。訪問時の第一印象はとにかくショックでした。「世界では治療できず辛い思いをしている子供がいる。日本は平和ボケで自分は何も知らないな」と感じました。同時にここに自分のやりたかったことがあると強く感じました。その後、年に1~2回の訪問を経て2012年に登録ボランティアのセミナーを受けました。

古 ご家庭や仕事の調整など、活動にあたり難しかったことはありますか。

矢 最大の理解者は家族で大変感謝をしています。職場の理解も頂きました。難関はドイツ語でした。聞く・読むの練習は出来ても話す練習が出来ませんでした。

勝 教室などは利用されず独学だったのでしょうか？

矢 独学です。ドイツでは学校を探したのですが結局いけないままでした。

古 平和村では通訳はいないのでしょうか？

矢 いないです。細かいドイツ語が必要な場合は日本人スタッフを頼りにしていました。



古 平和村以外の国際活動について、教えていただけますか？

矢 母国からドイツに来れる子はごく一部です。現地でもより良い治療を受けるため何か力になれないかと考えました。

アンゴラやカンボジア、ウズベキスタンなどを実際に訪ねました。そんな中、キルギス訪問時に平和村パートナー団体の計らいで首都ビシュケクにある第4病院を見学する機会がありました。そこの若い医師は、「もっと勉強をして自国の医療を発展させたい」と語るなど高い意欲を感じました。キルギス人は日本人と顔が似ていることもあり親しみを感じました。さらに、「この国の人々とは私が関わっていける何かがある」と強く感じました。キルギスは5回訪問していますが、その度に様々な交流が行えています。若い先生方の成長を少しでも助けることが出来れば、治療を受ける子供たちにも恩恵があると思い、私が行える活動の中ではきっと効果があると感じています。今はドイツと共にキルギスに力を入れたいと感じています。コロナの状況が変化し渡航できるようになった際は、私の経験や知っていることを伝えていきたいと思っています。



[写真提供 ドイツ国際平和村]

「研究に興味があるが、何をすればよいのか分からない…」という声にお応えし、編集担当の山口佳小里と高橋恵里が気まぐれに研究について綴ります。

古 リハビリ職に期待されている点はございますか？

矢 国は違っても体の構造や怪我の治癒は同じです。しかし、栄養状態や医療の方法によって違いは作られ、日本では治癒するものが命に係わる場合があります。また後遺症など思うような結果とならない場合もあります。そんな中、患者さんの回復の手助けをしているのがリハビリ職の方々です。手術は1/3から1/2でその後のリハビリが最終的な結果に繋がると感じています。私は海外で困っている方々の医師の部分のアプローチは出来ませんが、セラピストの皆様には今後も医師のできないリハビリの部分頑張ってくださいと感じています。患者さんの笑顔を見るとさらにはまっていく人も多いと思います。

古 今後医療人になる学生の方々へ一言頂けますか？

矢 怪我や病気をした人が生活を取り戻すため医療は必要になります。医療の世界にゴールはなく非常に奥が深いです。人々の笑顔のある生活のために努力のできるハートのある医療人になって頂きたいと感じています。

**矢倉先生、ありがとうございました！
今後の更なるご活躍をお祈りしています！**

**[連載] 山口高橋の
研究万華鏡***

『 質的研究の入りぐち 』

皆さんは国際的なりハ支援活動をする中で、地域のある課題を取り巻く現状を明らかにしたいと思うことがあるでしょう。現状を明らかにする調査研究には数値を用いて結果を表す量的研究と、インタビューなどで得られる質的データを質的に分析する質的研究があります。人々の生活やコミュニティが対象の場合は数値では表現できないことがたくさんあるので、この研究会にも質的研究に興味のある方がおられるかと思います。実際に、本研究会の学術大会にて山口ら(2018)および高橋ら(2019)は、国際的なりハビリテーション支援に関する研究では、質的研究が多く用いられていることを報告しました。質的研究では、①個人の主観的な意味づけ、②調査対象(者)の多面性、③対象の全体像、④社会現象のメカニズムなどを知ることができる¹⁾とされています。これを読んだだけでもやってみたくなる調査手法ですよ。

ただし、インタビュー結果をまとめるというと簡単そうに聞こえますが、分析においては専門知識や手法を知ることが必要です。量的研究において統計学の知識や統計ソフトの操作方法を知ることが必要であるように、質的分析手法を身につける必要があります。質的研究は取りかかりやすいですが、適切な方法で分析されていないため、研究の報告が説得力に欠けることもあるかと思います。また、例えば量的な事象を扱うことが多い学術分野もあるため、前回の連載にあったように自分の興味に合う学術領域を選択することも必要です。

質的分析手法を身につけて誠実に丁寧に分析すれば、世の中のふわっとした現状を図や言葉で整理し、説得力のある説明ができるようになります。今後、気まぐれに分析手法も紹介してみたいと思います。

1)大谷信介ら：社会調査へのアプローチ第2版、ミネルヴァ書房、2005

(国際リハビリテーション研究会事務局、東北福祉大学健康科学部リハビリテーション学科、高橋 恵里)

【コラム】 大室和也の『世界のめがね』

大室 和也 (国際リハビリテーション研究会理事、認定NPO法人 AAR Japan [難民を助ける会])

【自助具】

国際リハ研究会では、各国の活動で制作した自助具の事例を集めるウェブサイトA/TBankを運営しています。自助具は、国や地域で異なる文化的背景や、個々人の生活環境や動作とも関係が深いため、成し遂げたい行為や目的は同じであっても、様々な素材を用いて様々な形をとります。国際リハ研究会では、その多様性を集積し概観してみようと企んでおりますので、ぜひ皆さまもA/TBankに事例を投稿してください(詳細は事務局まで) ▼みなさんも、自助具または身の周りの道具と、体との関係に不思議を感じる人が多いのではないのでしょうか。体が道具に合っていると道具の能力が最大限発揮され、体の一部のようになるし、合っていないと関節や筋、感覚器に不具合や不調が生じてしまう。この違いは何によるのか、誰か知っていたら教えてください ▼最近、こうした自助具について、人類学的側面から考えてみるという研究会に参加する機会を頂きました。そちらの研究会での活動にも、国際リハ研究会の皆さまのお力を存分にお借りすることになると思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

大室理事は佐賀を拠点に世界中で活動を展開中です。このコラムではそんな大室理事のメガネを通じた世界の姿を毎号お届けします。



ぬかるむ中のモーターバイクは一見危険そうですが、四駆よりもスタックする可能性が低く、費用も安いのでよく用いられています。

【お知らせ】

【国際リハビリテーションセミナー2021・第4回通常総会を開催しました!!】

6月19日(日)、セミナー「地域におけるActiveAgingに関するクロストーク-タイと日本で制度と実践をつなぐには-」ならびに総会をオンラインで実施しました。

【国際リハカフェ開催!!】

国際リハカフェnorth, east, westに加えて、southとして九州支部を始動しました！
8月19日(木) 19:30～south tele.1を、理学療法士協会伊藤智典様を講師にお迎えして、
9月4日(土) 19:30～north tele.3を、理学療法士、JICA岩手デスクの菊池真美子様を講師にお迎えして開催する予定です。詳細は追ってメーリングリストやFaceBook等でご連絡いたします。

編集後記

医療の目的は「人の幸せをお手伝いすること」だと思いますが、国際支援の実践に触れると「人の幸せをお手伝いすること」を目的とすると行えることはもっと多いと感じさせられます。本号にご協力を頂いた皆様、有難うございました。(古川 雅一)
世界で気候変動や感染拡大など、大きな転換期を迎えている今日、記事を通して「大事にしたい変わらないもの」とは何なのかを考えるきっかけをいただきました。これからも皆さまに素敵なNLをお届けできるよう、そして国際リハ研究会のアップデートに少しでも力になれるよう努力して参ります。(大西 海斗)

事務局 編集担当

高橋恵里 (東北福祉大学健康科学部リハビリテーション学科) 古川雅一 (仙台医健・スポーツ専門学校理学療法科)
大西海斗 (びわこ学園医療福祉センター草津) 山口佳小里 (国立保健医療科学院)

【研究会FaceBook】 <https://www.facebook.com/pages/category/Nonprofit-Organization/国際リハビリテーション研究会-1951070205159667/>
【お問い合わせ】 国際リハビリテーション研究会事務局 jsir_office@gmail.com

